

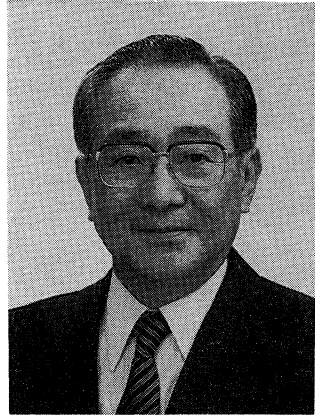
非歴史家の辯

城 崎 進

計らずも神戸女学院に院長としてお迎え頂き、その責を全うすべく勉強の日々を過ごしております。私は、前任校において大学教員として四十年余を勤め、特にその間学部長、院長・学長代理、学長などの行政職を十数年経験致しましたから、業務執行に関してはさほど戸惑いはありません。しかし、私にとって勉強の最大の課題は、神戸女学院の人間となるということです。

そして、私のこの課題にとつての最良の教科書となっているのが、「総説」「各論」二巻からなる『神戸女学院百年史』です。私は、この『百年史』の浩翰かつ精密なることに驚嘆しながら、この歴史編集にたずさわられた人々の意欲と努力に対して最大の敬意を表さずにはいられません。特に、昨年百周年を迎えた前任校における歴史編集の状況と思ひ合わせると、この感が深いのです。

何故神戸女学院ではこのように立派な『百年史』を編集発刊出来たのだろうか。この私の疑問に、先日史料室から頂戴した「学院史料」創刊号の、当時の院長岡本道雄先生の巻頭言が答えてくれました。神戸女学院には質量共に優れた「史料」と「人」とがあった、というのがその答えです。この点については、神戸女学院におられる皆様はき



と同意して下さると思います。

さらに私を感嘆させたのは、前述の岡本先生の巻頭言の冒頭の辞です。

『学院史料』と名づけられる神戸女学院史料室の機関誌が発行されることになった。(中略) 今回のこの機関誌の発行は、次の『百五十年史』、『二百年史』のためのものである。私は感服しました。そして、第八巻に至るまでの各巻をかなりていねいに通読致しました。殆ど毎号寄稿しておられる顧問の渡辺久雄先生は、私が一九四二年に関西学院大学予科に入学した時のクラス担任で、関学入学に不本意であった私にその後半世紀近くを関学で生きるようになった精神的感化を与えて下さった先生方のおひとりですが、その渡辺先生が神戸女学院でこのような素晴らしいお働きをしておられたことを私は存知ませんでした。そして、各巻所載の多数の各稿の執筆者の皆様が充満している歴史家的意欲に、私は深く心をうたれました。実は、これこそが私自身には最も欠如しているものなのです。

私の専攻は「聖書学」「キリスト教学」ですが、学界では、特に若い頃は、私は「歴史屋」として認識されています。それは私の最初の研究論文が「死海写本の年代決定上の諸問題」という考古学の領域に属するものであったためかも知れません。事実、その後私は、各種の事典、講座類に、何編もの「イスラエル史」「イスラエル民族史」

「イスラエル宗教史」などを執筆しています。しかし、それらは単に既刊の歴史家たちの所説を取捨選択して、多少の自分の解釈を加えて要約したものに過ぎず、とても「歴史」と呼べるようなものではありません。それに、私の関心は常に史実から歴史伝承への発展過程、さらに聖書文献編集の際の神学的動機といった伝承史的・編集史的なものに集中しています。

それだけに、「学院史料」各巻所載の各稿は、第一次史料を抄録し、発掘し、分析し、分類し、解説し、復元し、注釈し、記録保存するという、最も基本的な作業を忠実に進めておられるものであり、私は心から敬服するものです。さきに私は歴史家的意欲と申しましたが、その基底には執筆者の皆様の神戸女学院に対する熱愛のあることを想わずにいられません。いかに歴史の専門家であろうとも、その歴史をわが事、わが生命の一部と見做すことなくして、どうして歴史家的意欲を充満させることが出来ましょうか。私は、皆様にならって、神戸女学院の歴史に連なり、それをわが生命の一部とすることを学び、それを誇りとする者になりたいと思います。

非歴史家である私が学院史料室および「学院史料」に直接貢献し得るところは少ないと思いますが、せめて学院行政にたずさわる者のひとりとして、その発展充実のためのお手伝いをさせて頂きたいと願っております。